

「再評価後の抗生物質の使い方」

〔著〕 清水 喜八郎 東京女子医科大学教授
紺野 昌俊 帝京大学助教授

慶応義塾大学客員教授
長谷川 弥 人

抗生物質の偉効はあまりにも顕著であるので、かえって“どんな使い方をしてもよい”とか“感受性検査で、感性の成績が出ればそれはすぐ臨床的に効果があることだ”と誤解している方がきわめて多いようである。私は在職中機会ある毎に、抗生物質の選択は原因菌に対する抗菌力のほか、体内分布の状況、血中濃度、疾患の特殊性、副作用などを考慮に入れて決定すべきだと強調して述べていたが、このような状況の改善はなかなかみられなく、単に私の無力を歎くのみであった。最近ある方の調査によると全国大病院の抗生物質の消費量をみると、まちまちであって、一定の傾向を認めないという。これは抗生物質の正しい使用規程が化学療法学会の活動にもかかわらず徹底していない証拠ともいえよう。このような時期に私の敬愛する清水・紺野両博士による『再評価後の抗生物質の使い方』という本が出版されたことは臨床医家のためにも、私自身にとっても大変喜ばしいこと

である。また患者にとっても大いなる福音であろう。抗生物質は正しい使用法なしでは、治るべき感染症が治らないからである。

執筆者である清水・紺野両博士は周知のように多年この方面の研究に積極的に従事し、かつ臨床経験がきわめて豊富であるし、また再評価の委員として、厄介なその作業に参加し、膨大な文献を精力的に読破批判し、しかも活発な議論を尽くされた方である。このような抗生物質に関する著書の著者として現在における最適任者と断言して憚らない。

内容を簡単に紹介すると、総論として抗生物質の発見の歴史と分類、作用のメカニズム、感染症の変貌を述べ、次章には各論として各種の抗生物質について論述している。第3章は使い方を臨床家の立場から述べ、次の章は副作用について留意すべきことを論じた。第5章には臨床使用上の問題をあげて論述した。付録として抗菌力測定と体液濃度測定法について述べ問題点を指摘した。

本書の特長をいえば、1) 対話形式で、極めてわかりやすく書いてあって、しかも該博の知識が盛られている。2) 同種の抗生物質を相対比して、その臨床上の優劣を論じている。3) 一覧表があって、比較検討するに便利である。4) 第3章の使い方は臨床家にとって、最も重要なことであるが、このように総括的に述べた本は、従来きわめて少なかった。臨床家とくに感受性試験以外にあまり関心のなかった方にぜひ読んでいただきたいところである。5) 小児の使用量も従来一般に記載が少ないが、本書に明確に指示されているのも貴重である。6) 付録は検査室の担当者により参考となろう。

要するに本書は抗生物質を使用する臨床家はもちろんのこと、抗生物質に何らかの関連のある方はぜひ読むべき良書であると信じ、広く江湖に推薦したい。

A5 頁310 図19 1978 ¥3,200 千200
医学書院刊